



TITLE:

# 雍正帝の儒佛道三教一體觀

AUTHOR(S):

塚本, 俊孝

---

CITATION:

塚本, 俊孝. 雍正帝の儒佛道三教一體觀. 東洋史研究 1959, 18(3): 284-300

ISSUE DATE:

1959-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/148161>

RIGHT:

# 雍正帝の儒佛道三教一體觀

塚 本 俊 孝

## 序

一、性宗の學に於ける領悟への途

二、三教一體觀

三、三教一體觀の實踐

## 結 言

## 序

大清世宗憲皇帝實錄卷一の開卷早々に、康熙十七年戊午十月三十日寅時と雍正帝の誕生を記し、ついでその人物を紹介して、

上 天表奇偉、降準顧身。雙耳豐垂、目光炯照。音吐洪亮、舉止端凝。大智夙成、宏才肆應。允恭克讓、寬裕有容。幼耽書史、博覽弗倦。精究理學之原、旁徹性宗之旨。

天章潛發、立就萬言。書法遒雄、妙兼衆體。每籌度事理、評隲人材。因端竟委、燭照如神。韜略機宜、皆所洞悉。而性尤純孝、婉愉愛慕、悉本乎至誠逮事。

と述べて、帝の全貌をうまくとらえている。そのうち帝の學問を、理學の原に精究し、性宗の旨を旁徹したとのべ、理學と性宗をならべ、精究し、かたわら徹したと、理學と性宗との通じうる關係を推察せしめる。

また文獻叢編 清世宗關於佛學之諭旨ノ二に、「朕居藩邸、留心內典、於性宗之學、實深領悟。」と述べて、內典即ち佛典に心を留めていくうち性宗の學において深く領悟したと、佛學により性宗に至つたことを示している。

一般に帝は藩邸にあるの四十五年間 シナの學問文藝に通ぜざるなく、とくに禪學に造詣ふかく、圓明居士と稱し

てその奥旨に徹底したとされている。しかして雍正十一年に出版された御選語録の總序等をみると、確かに帝は禪的悟りを得たものであるが、私は特に性宗といつている點に注目したい。この性宗の旨に徹底した領悟が、帝の儒佛道三教に一貫する悟りであり、帝にあつては、この悟りが政治から日常一般にまで一貫していると考ええるものである。以下帝の三教一體觀を考察したい。

# 一、性宗の學に於ける領悟への途

御選語録卷十七の末にある十七卷まで全部の後序と考えられる御製後序の冒頭に、「朕は少年の時、内典を喜閲し、惟だ佛事を爲すを慕うあり、諸公案において總べて解路をもつて推求したが、心禪宗を輕んじ、如來の正教はまさに如是でない」と謂う。聖祖勅封灌頂普慧廣慈大國師章嘉呼土克圖刺麻は眞に再來の人、實に大善知識なり。梵行精純、圓通無礙にして、西藏蒙古中外の諸土の歸依する所、僧俗萬衆の欽仰する所なり。藩邸の清閒、時に茶話に接すること十餘載、其の善權方便をえ、因つて究竟のこの事を知りぬ」と述べ、つゞいて帝は悟入への道として三關を透つ

たが、初關にあつて帝が惟だ一事實の理を知つたのに、シナ禪侶迦陵性音は已に元微に徹したとなし、重關では、章嘉が王のいまみる處、一步すすむと雖も、譬えば、庭院中にあつて天を觀るが如く、天體無盡、究に未だ悉見せず、法體は無量で、まさに更に勇猛精進を加うべしと云つたに對し、帝がその言葉を迦陵性音に問うと、茫然としてその意を解せず。支吾してこれは刺麻教の回途工夫の論にすぎずと答えている。帝は更に章嘉について癸巳年（康熙五十二）正月二十一日末後の一關を透つて、三身四智合一の理（後述する）物我一如本空の道に達して、大悟徹底した。帝はその悟りを得たことを、これ朕が平生參究の因縁であり、章嘉刺麻は實に朕が證明の恩師なり。其他の禪侶輩は曾つて朕が藩邸にあつて往來し、壬辰より癸巳の間（康熙五十一年正月より五十二年正月まで）七度の法會にあずかつたにすぎないと述べている。

章嘉刺麻は第五代達賴刺麻の高弟で、西寧の人、康熙帝の西藏蒙古服屬政策のもとに來たり、北京や多倫の彙宗寺にあつて、清朝と西藏の間に立つて、政治的にも活動しひきつゞき特に乾隆帝に優待せられたが、よく佛學に通じ蒙

古經及び漢譯大經は暗誦せざるなしといわれ、康熙三十九年、雍正二年の北京版西藏大藏經の開版に對看刺麻<sup>(2)</sup>などの中心人物となり、更に乾隆三十七年の滿蒙蕃漢四譯大藏經の開版にあたつては、その總裁となつた。

かく章嘉が佛教全般に通じ、ラマ教の顯教の學問が因明・般若學・中觀學・俱舍學・戒律學を段階的に修めていたに對し當時の禪宗は、帝が「如來の正教まさにかくの如くでない」と云つてゐる如く、頓禪が末梢へいくところ、ただ口頭の滑利に流れ、「近世の宗徒、未だ門庭を踏まずして、先ず堤岸を決し、私意を一腔し、唯だ佛を呵し祖を罵せざれば、宗門にあらざるが如きを恐れ、強いて解事をなす。學人は饒舌にして、狐が象跡を行き、鵲が鳳音を學ぶ。これ何の言か、これ何の言か。」(御製後序)という狀況であるので、帝は佛學全體の根本にさかのぼつて本分の悟りを追求し、佛教全般に通じた章嘉を證明の恩師となしたと考へる。しかして迦陵性音が刺麻教の回途工夫の論にすぎないといった三關を透つての悟りへの道は、漸悟を主張する刺麻教の影響とも考えられる。

御選語錄の御製總序に、「如來正法眼藏教外別傳は實に

三關の理を透るにあり」と冒頭して逐次三關の内容を説明し、

初關 それ學人初めて解脱の門に登れば、業繫の苦を釋きながら、山河大地、十方虛空ならびに皆な消殞す。現在七尺の軀は地水火風にすぎず。自然に清淨に徹底すれば、一絲も掛けず。これを名づけて初歩の破參となす。前後除斷する者なり。

重關 知りぬ、山は山、河は河、大地は大地、十方虛空は十方虛空、地水火風は地水火風、乃至 無明は無明、煩惱は煩惱、色聲香味觸法は色聲香味觸法、盡くこれ本分、皆これ菩提。一物も我身ならざるはなく、一物も我已なるはなし。境智融通、色空無礙、大自在を獲て常住不動なり。名づけて大死大活となす。

末後關 家舍は即ち途中にあり、途中、家舍を離れず。(眞諦は俗諦にあり、俗諦にあつて眞諦を離れず)明頭も合い、暗頭も合う。(差別より見るもよし、平等より見るもよし)寂は即ち是れ照、照は即ちこれ寂。斯を行い、斯に住し、斯を體し、斯を用し、斯を空し、斯を有し、斯を古し、斯を今し、無生なるが故に長生、無滅なるが

故に不滅。かくの如く惺惺行履せば、無明執着、自然に消落し、方によく末後の一關を踏む。

この三關の理を約言すれば、初關は空を、重關は有を、末後關は空有をいつており、前述の三身四智合一の理にかなう。即ち帝は御選語錄卷十二の帝自身の語錄中に三身四智を説明して、「清淨法身の性は空にかなう、百千萬億化身の性は有にかなう、圓滿報身の性は空有にかなう。大圓鏡智は即有即空、平等性智は即空即有、妙觀察智は空有を知つて知らず、成所作智は鏡の三身三智を攝するが知し。……………乃ち不二の法なり。」といつてゐる。

總序ではかく悟入への道を述べ、ついで達摩西來し歷代授受して今日に至つたが、聖を去ること遙遠にして魔外まします繁く、佛心に達せずして祖席に妄參し、金山は泥封せられ、慧日は雲蔽せらる。その訛謬を約して三端ありとなし、休去歇去では見性する能わずとか、揚眉瞬目・豎指擎拳して識神の活計となすなども茫茫として據るなし。經教語錄中より葛藤を挂取して、諸方に擧揚するのは、人の涕唾を拾つて狂亂の知見を發するものであるなどと、當時の禪の技術や葛藤を否定して、かくの如きものは宗旨あき

らかならず、浩却沈淪すとなし、朕は帝位に即いて以來、周公孔子の轍に循つて、十年いまだ禪宗を談しないが、邪說魔説が妙心を滅盡するにしのびず、淄澠を辨味して語錄中より、向上を提持し眞宗を直指するものを選んで、その至言をとり手づから刪輯した旨をのべ、僧肇 永嘉 寒山 拾得 滌山 仰山 趙州 永明 雲門 雪竇 圓悟 玉林的十二禪師と道教の紫陽真人 最後に雲棲蓮池大師をあづけている。

帝自身の語錄を加えてこれらの語錄には、すべて帝が序文を附しているので、この序文によつて帝の禪學における主旨を理解することが出来ると思う。まずその内容を紹介したい。

1 僧肇 ……菩提達摩以前の時人 震旦いまだ教外別傳の旨を聞かず。(僧肇を)祖席に入れるを得ずといふ。朕は肇法師の作る般若無知・涅槃無名・空有不遷・形山祕寶の諸論を閲するに、宗旨を深明するにあらずれば、何ぞ能く了了かくの如くならん。……………奚ぞ封疆を隔せんや。何ぞ今古あらんや。豈に菩提達摩いまだ來らざる以前 震旦宗旨なからんや……………

2 永嘉 古人は時節・因縁に遇つて、毎に云う言下大悟と。それ言下大悟の悟りは言にあらず。……………黄梅

曹溪を送つて九江驛邊に至り、兩人ともに語る。曹溪云う、ただ自性自度になうと。黄梅云う、かくの如しかくの如しと、では一體、自性自度であれば、黄梅は何を授け、曹溪は何をうけたのであろうか。永嘉の參承はただ一宿のみ、故に一宿の覺という。今その問答の語をみるに、永嘉は全く逆水の機で、毫も順水の意がない。然れば曹溪は何を授け、永嘉は何を受けたのか。知らず、永嘉まさにこれに従つて曹溪の乳を得たりと……………永嘉言句 西竺推して東土の大乗論となす。朕はこれを披覽するに、修悟雙圓にして、乗戒兼妙なるを嘉す浅より深にいき浅深一致なり。……………

3 寒山拾得 寒山詩三百餘首、拾得詩五十餘首、唐の閻邱太守、寒巖より寫して閻浮提界に流傳す。讀者或いは俗語となし、或は韻語となし、或は教語となし、或は禪語となす。摩尼珠の如く、體は一色にあらず、處處みな圓、人目の見る所に隨う。朕もつて俗にあらず、韻にあらず、教にあらず、禪にあらず、眞に乃ち古佛の直心

直語となすなり。……………性行一貫、乃ちともに二大士の詩を読むべし。……………

4 滄山仰山 それ佛祖代あい承け、稱して父子となす。世間の名教を假つていうと雖ども、出世の眞傳を表す。しかして大死大活、慧命これ續く。……………しかしてその中、父子濟しく美なるもの滄仰をもつて最となす。……………

5 趙州 ……………趙州諗禪師は無生法忍を圓證し、本分の事をもつて人に接し、龍門の桐、高きこと百尺にし、て無枝、……………趙州の人に接するが如きは、誠に直指人心、見性成佛をなす。……………

6 雲門 ……………朕いま雲門言句を刊録刪輯するに、道は雲門の意旨とこれ同じなりや別なりや。雲門は古德、豈に落草を畏れんや。朕も亦大丈夫、豈に雲門とこれ同じきや別なりやを問わんや。然りと雖ども超情絶解、直指自心、雲門の如きは實に奇特となす。……………

7 永明 宋初の杭州永明智覺禪師、平生の著述するところ、宗鏡錄・唯心訣・心賦・萬善同歸等集、凡そ千萬言、並に大藏にあり。海外に流傳するもあり、朕が披閱

して採録するに、敬禮喜悅にたえず。眞にいわゆる曉日に明逾し、太清に高越し、鼓師の子弦の如く、衆響ともに絶つ。摩尼寶の五色の光を生ずるが如し。信に曹溪後第一人、歴代大善知識に超出せる者なり。特に妙圓正修智覺禪師を加封す。卷中の萬善同歸集一書は、禪師が自ら教海の一塵を略述して、法界の含識に普施して云う。大小齊觀、宗教一貫なるをみずから證明せりと。ただ學人、須らく必ず眞參すべし。實に悟るところあり。……禪師云う。先ずその宗を明らかにせば、方に能く道を進む、若し一向に末を逐わば、實に妨ぐる所あり。……

8 紫陽眞人 紫陽眞人、悟眞篇を作つて元門の祕要を明らかにし、また頌偈等三十二篇を作つて、一ち、一ち、性地に従つて、西來最上一乗の妙旨を演出す。自叙して云う。これ無爲妙覺の至道なり。標して外集となす。……眞人云う。世人の根性は迷鈍にして身あるに執し、死を惡くみ生を悦ぶ。おうむね了悟に難し。黃老はその貪著を悲れみ、修生の術をもつて、その欲する所に順つて漸次これを導く……篇中の言句、了徹を眞證し、妙圓を直指す。禪門の古徳中、かくの如く自利利他、不

可思議者、なほ希有となす。禪師薛道光の如き、皆な歸依して弟子となる。亦 宜べならずや。……

9 雪竇 ……經に云う。一切の賢聖は皆な無爲法を以てし、しかも差別あり。一彈指なお且つかくの如し、況んや乃ち、答にあり、問にあり、字にあり、文にあり、豈に顚預し渾同し、また選擇なきをえんや。昔年雪竇、眉毛地に拖き、この葛藤を留む。今日圓明（雍正帝）髻を解いて珠を探す。蛇足一上。茲に編するや、皆なこれ第一義諦、最上の宗乘なり。學者、外求にからず、直下に自證せば、則ちこの言句を離れず、皆な凡より聖に入るの機なり。……

10 圓悟 小玉小玉と頻りに侍女を呼ぶのは、何のためだろうか。唯だ外に居る意中の郎君に自分が此處に居るぞと、知らせたいばかりじや。圓悟動禪師はこの言下に因つて頓徹した。この語や綺語なりや、禪語なりや、塗毒鼓のあたり、豈に側耳に容るべけんや。……圓悟という名にそむいて平生、絡索多く、即ち圓明主人（雍正帝）一番の選録、亦また鈍置少なからず。

11 玉琳瑯 ……皇祖世章皇帝、方夏を撫有し、萬

幾の餘暇、玉琳琇・茆溪森父子と、心性の學を究竟し、一時遇合す。蓋し黃帝・成湯の事と、二なく別なし。我が朝、夙に崇僧の習ありて然るに非ざるなり。朕は玉琳琇父子の書を覽るに、宗乘の妙旨を闡揚し實に利人濟世、果日の空にありて、迷雲頓みに淨なるが如し。……………

12 圓明（雍正帝） 夫れ本妙の明心、大圓の覺海は見聞知解の通すべき所にあらず。故に語言文字の立つべきにあらず。然して古來大德、最上の眞乘に於いて學人に灼示し、直言隱さず、法の説くべき無きの中に於いて、無意の言句を演ず。超情絶解、自心を直指す。了了知るべし。昭昭昧らからず。聽者をして音前に薦取せしめ、性地まさに承け、幾先に神悟するに非らざれば、則ち句下に滯情す。……………朕、昔しまた時に妙旨を談ずと雖ども、實に未だ羣書を徧閱せず。性に任せ卷舒し、縁に隨つて出沒す。實に杜選に由り、經文に法るにあらず。……………今 昔人の語を見るに、朕の言う所と多く約せずして暗符し、無心にして自ら合う。圓音かくの如し、啞然禁ぜず。……………道理昭然、非有にして非空、不出にして不入、妙性遠からず、明覺遙かならず。朕 實に

一性の圓通を本にして、五般の實語を作す。唯だ此の一、事、餘の二は眞にあらず……………

13 雲棲 達摩いまだ梁土にいたらざる以前、北は則ち什公の弟子、經文を講譯し、南は則ち蓮社の諸賢、淨土を精修す……………朕は肇法師語錄序において、已に宗教の合一を詳言せり。淨土の旨に至りても、又豈に二あらんや。……………曹溪十一傳して永明壽禪師に至り、始めて淨土を以つて後學に提持し、……………明の蓮池大師に及んで専らこれをもつて家法となし、浙の雲棲に倡導す。その著す所の雲棲法彙一書は、本分において徹底圓通の論にあらずと雖も、然かも已に皆な正知正見の説なり。朕はこの淨土の一門を表して、學人をして水月道場に宴坐し、岐してこれを視て、般若を誤謗するに致らざらしめんと欲す。故に其の言の融合貫通せる者を選んで、刊して、外集となし後世に示さん。もし學人、宗旨明らかならざれば、南無阿彌陀佛の一句をもつて無義昧語となし、一念萬年これと抵對せば、自然に鼻孔に摸著せん。……………

以上僧肇から雲棲にいたる御製序の主張は、帝自身の語



録の御製自序の「性地まさに承け」と「一性の圓通を本となし」との語句で統一出来ると考える。即ち「性地まさに承け」は、永嘉の一宿の覺は黃梅の曹溪における如く自性自度であること、寒山拾得の詩が古佛の直心直語、趙州の枝葉におちいらす誠に直指人心、見性成佛、雲門の超情絕解、直指自心、紫陽真人の一ち一性地に從つて、西來最上一乗の妙旨を演出す、玉琳琇の心性の學を究竟しなどと同じ主張であり、雪竇と圓悟はのちに葛藤を残したと批判されている。「一性の圓通を本となし」は、僧肇の宗教合一、永嘉の修悟雙圓 乘戒兼妙、寒山拾得の性行一貫、永明の大小齊觀 宗教一貫、雲棲の淨土の旨に至つても 又豈に二あらんやと同じ主張である。

しかしてこれらの諸禪師の中、最も讚嘆し帝の思想に大きな影響を与えたと考えられるのは杭州永明知覺禪師である。「朕 披閱採録して敬禮喜悅にたえず。」「曹溪後第一人、歷代大善知識に超出する者なり、特に妙圓正修智覺禪師と加封す。」と讃辭を贈っている。また帝自身が、永明の主著である宗鏡錄一百卷の大綱を選著したと考えられる宗鏡大綱を刊行しているし、宗鏡錄をも重刊している。(清世

宗關於佛學之諡旨の序) 又この御製序にある通り萬善同歸集も刊行している。しかしてこの宗鏡錄は永明が門下の英哲を集めて、大乘經論六十部と印度中國の聖賢三百家の言を探り、五家の禪派と法相・華嚴・天台三家の法門との融合を計り、萬法唯心のもとに一切の宗教を統一せんと企てたものであり、萬善同歸集は淨土と聖道二門の融合を計つたものである。永明の考えでは、禪宗内の五派の分列はいうに及ばず、教律禪の三大宗派の區別をみとめず、更に儒佛道の三教を融合せんと企てたのであつて、その融合を得るのは唯だ一心なるものによるのである。しかしてこの一心は起信論の一心と同じである。<sup>(6)</sup> 宗鏡錄自序には、「いま祖佛の大意・經論の正宗を詳らかにするに……一心を擧げて宗となし萬法を照して鏡の如くせん」と述べて眞心をもつて宗の體とし、もつて萬法を照すに在りとしている。永明は天眞の佛智は本有であり、妄縁の生死は體空なる故、妄識の影像を除去して、直に眞心の本性に歸還すべしと解脱の方法を提示した。また性相融合の説にも言及したが、結局は相を性に融合せしめるもので、華嚴圓教を最上乘となすの旨が、その著書の各所に散見される。つまり

永明の學問の基礎が華嚴<sup>(7)</sup>であるためである。しかして帝の自序の本妙の明心、大圓の覺海は絕對眞實の本體で、それが性・一性であり、體たる性に歸ることが悟りであり、帝はその悟りで一貫せんとしている。かく本體を課題の中心として説く宗旨が性宗<sup>(8)</sup>といい華嚴宗などがこれに入るが、かかる點で、帝が性宗において領悟したと言っている如く解せられる。

なお理學の原を精究し、性宗の旨を旁徹した過程を私考するに、朱子によると、性は太極の一理そのままが萬殊の形によつて存しているのであるからすべて同一である。ところが萬殊の形に賦せられた現實の性は、氣質の差異によつて制約されている<sup>(9)</sup>。この制約を除いて體たる性に歸ることが、帝のいう性地まさに承けということで、體たる性は同一不變であるから、一性の圓通を本となしてとなるが、その性に歸る方法が悟りへの道で、これは帝にあつては佛教の禪の方法であると考ええる。性を太極の一理そのまま即ち本體とするから、これも性宗と言えらると思う。

しかして、永明の一心と帝の一性との關係であるが、程伊川によれば、命・理・性・心は同一で、性即理 心即理

の二つの立場を全く同一の解釋によつて確立しており、更に、陸象山の「心即理」説は、人間の心の中に一理の性と人欲の情との共存を認めて「性即理」と言つた朱子説と根本的にはそれ程相違しておらず、象山は心内の人欲の情が結局は消滅するものであり、その故に情は實在性を持たぬ幻妄であると考え、心は性（一理）と情でなく情が滅して、心即理と言うわけである。つまり陸象山は行的立場から心のあるべき窮極の理想的な姿を強調している<sup>(10)</sup>。さらに王陽明に至つては、同じく心即理と言つても、人欲をうちに持つたままの人間の心そのものが、新しい倫理的規範の根柢となるべきであるという考え方を傾向的に含んでいる。この人欲を強く肯定していく時に、明末の李卓吾でもつて代表される王學左派の動きとなるのである。

帝の時代は、かかる王學末派の弊を救わんとし、理學の原に逆のぼつて理氣心性を明らかにせんとしたが、後述する當今法會でのちの乾隆帝が「皇父は現在佛をもつて如來藏を發し」と言っている如く、帝は理學の心性を、如來藏思想を代表する永明の起信論の一心の考えで、融通理解しさらに哲學上の空論でなく、學問と實踐とを強く結びつけ

て展開させたと考える。

## 二、三教一體觀

藩邸にある當時の帝の三教觀を伺いうるものは、御選語錄卷十二の帝自身の語錄に、

儒士三教の同異を問うあり。王云う、若し○以内を論ぜば、三教は實に同一道、迹象に泥み、事爲に涉つて妄に分別するべからず。儒は修齊治平を以て教を設け、道は虛無清淨を以て教を設く。その人に示す所以の者を究むれば、この○を外にするあたわず。而して釋教も亦、この○を捨離せず。既に捨離せざれば、即ちこの○内にして言わば、則ちこれ一貫と謂わざれば不可なり。若し、○の外を以てすれば、周孔・黃老の書は未だこれに言及せず。能くこれを明らかにする者は、惟だ釋典あるのみ、下士愚盲の小知見淺、○以内を謂うも尙ほ明らかならず。何ぞ○以外を暇究し、○以内の者を知らずして○以外の者に倚りて立たんや。若し○以外を明らかにせざれば、則ち○以内は無論頓地透脱するあたわず。もし盡くす處をうるも、猶ほこの○にあるが如し。人た

だ生死に拘滯するを知りて、その無生不死を窮むるを知らず。此れ一大關。惟だこの一路まさに透れば、即ち佛教を以て論せば、講演・戒律の如きも、何ぞ嘗つて宗と一貫をなさざらんや、必ず宗をまつて之が統攝をなすべく、宗を離れば、則ち盡く幻作に屬す。宗は乃ち第一義なり。然れども一また立たず。方にこれ佛旨。即ち此れ彼れを觀る。自から三教の分合を明らかにするの定論なり。圓明（雍正帝）は寧ろ汝等迂儒の謗に甘んぜんや。斷じて衆生をして苦海に長溺せしめて拯救指迷せざるに忍びざるなり。土聞きて愕然、諾諾して退く。

とあり、○即ち圓形の内では儒佛道三教は同一道であり、儒道はともに生死に拘滯して○形の外には言い及ばない。佛は生死を越えて無生不死を窮めるから○形の内外を明らかにし、○形内で言わば、その内にある儒道をも一貫していと言わねばならない。即ち佛教だけで論ずれば、講演を中心とする教宗、戒律を中心とする律宗の如きも、宗たる悟りで一貫しなければ、盡く幻作に屬する。儒佛道三教關係も三教ならびに存してしかも佛教の悟りで一貫しなければならぬと主張している。

また同語録に「……………吾が儒聖人、世間の法を切言して、命と仁を言うにまれなるは、出世間の法を棄つるにあらず。凡愚の空見に著するを恐れるが故なり。佛釋の出世間の法を切言して、是と非とを言うにまれなるは、世間の法を棄つるにあらず。凡愚の有見に著するを恐れるが故なり。釋教まことに聖人の明德新民・克己復禮の教に補するあり。聖教まことに佛言の戒行功德・因縁果報の教に補するあり。中外二聖、實に互に表裏をなす。化人度世の慈恩、實に同異なし。聖佛合一の微旨、凡夫の知識のよく推す所、口筆のよく示す所にあらず。惟だ證すれば乃ち知りぬ。測るべきに難きものなり。須らく各々努力參究すべし。余は實に一貫の宗に達す。強いて分別の論を立つるにあらず。決してあいあざむかず。」と述べて、儒佛は表裏をなし、その合一の微旨は、凡夫のはかり知るところでなく、帝の悟りという證をへてわかるものであつて、各の參究すべし。自分は、一貫の宗に達した。分別の論は立てたくない。という表現は、やはり帝の禪的な悟で一貫しているように考えられる。

即位以後、帝は政治におわれて遑なく、且つ佛教をたつ

とぶの疑をいだかれんことを恐れて、十年間かかる談論はなさなかつたが、庶政ようやく理まり、始めて三教合一の旨を擧げて互にあい詆毀する者の非を明らかにせん（清世宗關於佛學之諭旨二）とて、三教一體を説く上諭や御選語錄十九卷・揀魔辨異錄八卷を、それらの序文から見ても、雍正十一年に皆な選著しているが、それまでの十年間も、實錄等の公的記録には現れないが、私信たる硃批諭旨に時々、施政上のことに關聯して現れてくる。雍正元年六月十八日浙江巡撫李襲への硃批に、

粵鸚道統の傳を溯るに、堯舜より以つて周公孔子に至り、聖聖あい承け、精一にして雜ならず、もとより釋道に籍るなし。漢より以來三教流傳し、炳として三光屹然と鼎峙するが如し。千百年を歴て廢せず墜ちず。豈に道ならび行われて、あい悖らざるにあらざらんや。吾儒は正心率性、釋家は明心見性、元門は修心煉性、以て體を言わば則ち同じ。聖人の明德新民、如來の自利利他、太上の度人無量、以て用を言わば又同じ。中庸に曰く、その睹ざる所を戒慎し、その聞かざる所を恐懼す。内典に云う。六塵境に渉るも、心縁に隨わず。道德經に云う。

欲すべきをあらわさざれば、心をして亂れざらしむと。  
 以て進修の工夫を言うも、また未だかつて同じからざる  
 なし。

何ぞ下士、往往、管蠡の見をもつて、縦横に辯駁し以  
 て其の胸臆を逞うせんや。蓋し形迹によつて論じ、しか  
 も實は未だその奥蘊を窺わざるなり。その言もつて二氏  
 の學、全く世道人心に關するなしとなすも、孰か然らざ  
 る者あるを知らんや。

それ積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず  
 餘殃あり。理は周易に載る。善惡の報、影の形に隨うが  
 如し。義は感應篇に著わる。四生六道、因果輪廻の秘諦、  
 大藏諸經に散見す。その警戒・提撕・誘掖・獎勵する所  
 以は符節を合するが如し。その指歸を究むれば、人に勉  
 めて善を爲さしむにあらざるなきのみ。

況や細にして閨闈里巷、遠くして海遊・山阪は禮樂を  
 もつて維持し詩書をもつて訓導するべからざるものあり、  
 しかして二氏の教みなもつて其の歸向の誠を感發し、其  
 の隱微の蘊を消磨せしむるに足る。これによつてこれを  
 觀るに、釋道は寧ろ王化に補する無からんや。

試に問う。中國この三途をもつて二を去り一を留めて能  
 うや否や。能わざれば何ぞ必ずしも門を分け戸を立て互  
 に相い排擠し聚訟するが若きあらんや。然れども茲に末  
 法の黃冠緇流の下愚を顧りみるに、おおむね皆な餓夫・  
 懶漢にして、苟も利養を希うを以ての故に、招提・蘭若  
 ついに垢を藏し汚を納むるの地と成る。此輩なほ穀の稗  
 あり粟の粃あるが如く、惟だ孰が稗、孰が粃なるかを分  
 別するにあり、豈に穀粟を併せてこれを概棄すべけんや。  
 朕は向來、三教ならびに重し一體に尊崇し、奉佛・敬仙  
 の禮において稍も輕忽ならず。毎に見るに、章句の士、  
 二氏を鄙薄し動もすれば輒ち輕蔑・擯斥し、しかも名を  
 理學に託する者、尤も甚しきは、その操履を考うるに及  
 べば、理學の眞詮と又大いにあい徑庭す。これ井蛙・籠  
 潮の徒にすぎざるのみ。何ぞともに較らざるに足らんや。  
 浙江は俗に僧海と稱す。乃ち衲子の卓錫の勝地なり。  
 近十年來、ただに指月清機・宗風透徹なる者、みるにま  
 れなるのみならず、即ち教律に精通せる者も亦、未だ其  
 人を聞かず。叢林の凋謝 太息に勝うべし、汝は朕が意  
 を仰體し。公務の餘において留心護持せよ。寥落・傾頽

に過ぐるに至らざらしむも、必ずしも相に著して莊嚴せざれ。この論、汝みずから領會して衆に知らしむるなかれ、何ぞや、士子これを聞かば、徒に好佛の譏をなさん。釋子これを聞かば、我慢の相を増すに至らん。其の中庸の流は或は因つて縱肆し、甚だしきは清規を紊亂し法紀を干すあるに至らん。これ朕これを憐みて反つてこれを害する也、これを密にせよ。

とあり。儒佛道三教は心・性たる體においても、用たる進修の工夫や人を警戒・提撕・誘掖・奨勵する所以においても亦同じ、章句の士の否難は理學の淵奥を窺つてないからだと藩邸にあつた時の三教一體觀をそのままに述べている。これより十年後、清世宗關於佛學之諭旨の三に、「世に言う、儒釋道三教は各の宗とする所あるも、これを究むれば、三教の用は殊なると離も、その體は則ち一なり。蓋し古今ただ此の一理のみ。その教を立つるもの、大抵みな生智の上哲にして等倫を超越せるの人なり。吾儒の五帝・三王・先聖先師の如き、釋道の佛老の如き、皆な性地通明・全體瑩澈にして、皆な至理の精微元妙を洞矚する者なり。ここをもつて性と言ひ、心と言ひ、中と曰ひ、一と曰うも、脛

合せざるなし。ただ各々見る所に就き、これが爲めに闡發流傳して以て民を瞞びき世を覺す。……………若し精妙に造詣し理域に深入し能く宗旨を究明する者あれば、自然に水乳交融し、心心あい印して、はじめて彼此の分なし……」と述べて、性と心と中と一との三教の體たるものの同一體を主張している。

この最後の一體觀は初めに揚げた藩邸時代のもの、確かに鋭どきは失われているが、初めのものは、儒士が三教の同異をたずねたから説明したわけで、帝自身、分別したくない、また御選語錄の總序にあつた如く周孔の轍にしたがつて政治をとる皇帝となつていたからである。

### 三、三教一體觀の實踐

前述の如く、帝がその三教一體觀を公式に提示したのは、雍正十一年以後であるが、即位早々の宗教政策をみると、キリスト教に對して、康熙帝のいわゆる典禮問題に端を發する禁教への動きは、帝の即位により、愈々決定的となつた。即ち雍正元年十二月、浙閩總督滿保の奏により、キリスト教宣教師は、北京で曆學等に奉仕する者を除いて、澳

門に引揚げせしめる禁教令が發せられた<sup>(41)</sup>のち條件はやや緩和されて、現地出發まで六ヶ月の猶豫とその保護が與えられ、必ずしも澳門に引揚げるを要せず、廣州府に留まつてもよいこととなつたが、朝廷がキリスト教を嚴禁する方針が明らかとなり、各省にわたつてそれが實行された。回教に對しては、雍正二年正月、山東巡撫陳世倌の回教を左道惑民となして禁止を乞う疏に答えて、その傳來は已に久しいが、中國人の崇ぶところとならず、一般中國人の入信する理由がないから、僧・道・喇嘛と同様に認めよと云つてゐる。これらに對比して、さきの雍正元年六月浙江巡撫李馥への硃批に、三教の一體なることを説いて、從來から佛教の盛んな浙江の寺院の相に著して莊嚴にする必要はないが保護を内密に命じたことは、帝の宗教政策の基本がその體たる性を自覺する三教一體觀にあることがわかる。

また、江南江常鎮道王璣<sup>(42)</sup>の、度牒を帝が十方叢林に自由に發行させた事から、餓夫・懶漢の無賴の徒が僧界に入り弊害を起すので、喇嘛に度牒が給されている如く、官給度牒制にし、十兩・五兩の手數料をとらんとする意見に對し、帝は斷じて行ふべからず。殊に書生の習氣に屬す。法を犯

し非をなすものがあれば、隨時處分せよと寛大な態度をとつたことも、基本は三教一體觀にあると思う。雍正十年九月十三日福建巡撫趙國麟の奏に對する硃批に、「大凡そ虛文に務むる者は、ややもすれば軋ち、浮夸・不實の咎に落つ……それ誠は乃ち文章の本、吏治は即ち文章の體、いまだ本を離れ體を捨てて、更に文章あらざるなり。此らの虛偽・習氣は皆な薰陶漸染すること久しくして自覺せざるによる。また未だ人の勘破をへざれば、書生の輩、惟だ章を尋ね句を摘むを知るのみ。本體は何によりてか悟らん。天下、眞儒の寥寥なるを怪しむるなかれ、竟に文章の一道をもつてせば、二氏の教像に類するにちかし。語言は誠とあい背むき、吏治と涉なきの物たるに似るがごとし」と述べて、文章の本たる誠、文章の體たる吏治を離れて文章なく、官吏の虛文に流れるのを戒めて、その薰染が久しくして自覺しないからであり、薰染を除いて本體を悟ることが大切である。文章の道も釋道の二教が末を追わず體たる性に歸入せよというのと同じであることを示し、帝の三教一體觀における主張が施政の面によく現われている。帝の硃批にはよく誠であれと出てくるし、また序の實錄の帝の人

物紹介に悉く至誠を本として事に違ふとあるのも、人道の體（性）<sup>10</sup>を誠とみる點で、帝の性宗における領悟と通ずるものである。

さらに帝の三教の體たる性を三關を透つて悟るための本格的な實踐は、御選語錄卷十九に記されている當今法會である。その御製序に、「……………春（雍正十一年）より夏に入り、未だ半載に及ばずして、王大臣の能く徹底洞明せる者、遂に八人を得たり、……………朕が一日二日の萬機、諸臣の朝夕に位において懈らざるは、天下を平らかに治むるためにあらざるはなく、しかも即ち ここにおいて圓頓甘露の味を深く嘗む。此事の實際の理地たるを知るべし。しかして狂參および解路にあらず、得て託すべきの所なり。朕は帝王の位において、帝王の事を行う。宗乘に通曉するの虚名において何ぞあらんや。況やこの數大臣は皆な學問淵溥にして公忠方正の君子なり。一言一行ついで欺妄なし。また豈に此に假りて迎合し諂諛小人の事をなさんや。朕また豈に默傳口授して慧命を塗汚するの端を作さんや。誠に人はたして心性の地において根源に直透するをもつてせば、それ自他に利益をなすこと、至大にして至普なり。……………」

：内にあり焚修せるの沙門・羽士に至りては、また同時に證入せるもの六人あり。」と述べて、日々の政治や執務の場は、同時に悟りの實際の理地たるを示し、性宗における禪的な悟りを強く現實の政治にむすびつけ治國の道たる理學の働きがよく融通されている如く感ぜられる。「この數大臣は皆な學問淵溥」といふ言葉は、理學によく通じていることを示し、理學より性宗の悟りに至つたのが、わずか半載たらずで、理學と性宗の近似性をもうかがわせるものである。

この語録中の皇四子和碩寶親王長春居士（乾隆帝）の示超鼎に、「皇父は現在佛をもつて如來藏を發し、萬幾の餘暇、時に一たび隨喜し、片語を偶掲すること、醍醐を灌ぐが如く、禪衲に提持し宗門を整飭する所以をば、諄々、懇懇、直引し曲喻して、各々成就するものあらんことを期望した。たずぬるに如來教外の旨たる實に能くあまねく十方を利し、弘く萬品を濟う。會する者は自得し、一に本分の如く、當下せば、即ちよく、外求に假らず、しかも修齊治平・兵農禮樂・政刑德教及び飲食起居・出入作息・一切有爲法においてもとより干礙なし。故にこの一燈を護らんと



欲す。永く消殞する母れ」と述べて、帝の悟りて、宗門を整飭せんとし、しかも帝の禪的な悟りは修齊治平から出入作息にいたるまで一切の有爲の法にさまたげなく、一貫しうることを示している。

この悟り得た八人の王・大臣、六人の沙門・羽士は、十六弟莊親王、十七弟果親王、四子碩寶親王、王子和碩和親王、多羅平郡王福彭、鄂爾泰、張廷玉、張照、文覺禪師元信、悟修禪師明慧、妙正眞人、僧超善、僧超鼎、僧超盛である。

またこの帝の悟りの方向へ宗門を批判し整飭せんとした一つが、法藏・弘忍一派を魔説ときめつけ遂條論破した揀魔辨異錄八卷であるし、乾隆帝のなした佛教教團への去勢政策も、この悟りの方向につながるものである。

## 結 言

帝は少年の頃より佛典に親しみ、禪の公案に解路を求めたが、當時の禪宗は頓禪の末梢へいくところ、ただ口頭の滑利に流れている状況であるので、根本の悟りに溯らんとし、名聲たかく、全佛教に通ずる章嘉喇嘛に従つて空・有

・空有の三關の理を透つて大悟した。

帝の本源を求める精神は、また肇論 寒山拾得の詩 永嘉 滄山 仰山 趙州 永明 雲門 雪竇 圓悟 玉林 紫陽眞人 雲棲その他の著述や語録を読むうちに、悟りの本體である法性 即ち性の追求となり、各自の心にある本性にかえることが悟りであるとわかつた。その悟りからすれば禪の五派、佛教の教律禪もすべて一つであり、更に儒道も一つであることに到達した。これには永明の宗鏡錄に負う所が大であり、彼の禪に如來藏の考えや華嚴思想が深く存していて、その影響が考えられる。また理學の原を精究していたことも、あずかつて力あると、その近似性から推測される。かく本體を中心課題とする宗派を佛教では性宗というが、帝は性宗において領悟したと云つてゐる。かくて性宗での悟りの立場からみれば、儒佛道の體たる性・心・中・一は全く同一である。帝の性宗という言葉は儒・道にも廣げていねばならない。

かくて帝は中國人の思想宗教としては、三教一體が最も妥當であるという信念を持つたし、すべて本體をみきわめ、それに歸らんとする帝の悟りは、宗教に關してだけでなく、

廣く政治の場から、出入作息に至るまで、一貫していることとなつた。そして帝の悟りの方向へ禪宗はじめ他の佛教諸派も批判して整飭せんとした。

## 註

- (1) 嘯亭雜錄卷八章嘉喇嘛
- (2) 北京版西藏大藏經卷一五一目錄部
- (3) 嘯亭雜錄卷一清字經館
- (4) 長尾雅人著蒙古學問寺三學問寺の組織
- (5) 禪宗自體に兇率の三關とか、黃龍慧南の三關がある。鈴木大拙著思想史研究第一、第四慧能以後における悟りの道參照
- (6) (7) 高雄義堅著中國佛教史論雲棲株宏と明清佛教の雲棲教學の淵源參照
- (8) 龜谷聖璧著華嚴哲學研究第二節緣起諸法の説明第一項緣起諸法の體相、圭峯宗密撰述字并伯壽譯註禪源諸詮集都序(岩波文庫版)二七一頁參照
- (9) (4) 後藤俊瑞著朱子、二學說、二經驗界の形相的生成參照
- (10) 加藤常賢監修中國思想史第四章正統的思想の哲學的展開參照
- (11) 東華錄卷二十五、矢澤利彦著中國と西洋文化三雍正朝の天主教禁壓參照
- (12) 東華錄卷二十六
- (13) 雍正硃批諭旨王環
- (15) 拙稿雍正帝の佛教敎團批判 印度學佛教學研究第七卷第一號

## 昭和三十四年度京都大學大學院文學研究科

## 東洋史關係講義題目

(學部共通科目は除く)

## 東洋史學

研究	天下郡國利病書	田村教授
"	兩唐書吐蕃傳の研究	佐藤助教
演習	雍正硃批諭旨の講讀	宮崎教授
"	雍正硃批諭旨による史料蒐集	宮崎教授
"	續資治通鑑長編の講讀	佐伯教授
"	中國中世思想史研究	塚本教授
"	唐律疏義の研究	森教授
"	元典章の講讀	田中助教
地理學		
演習	中國地圖發達史	森教授
考古學		
演習	ガンダーラの考古學的遺跡	水野教授
"	中國佛教石窟論	長廣教授
中國語學・中國文學		
研究	清初詩論	吉川教授
演習	汪中文	吉川教授
"	說文解字注	小川教授
梵語學・梵文學		
研究	梵文マニースクリプトの解讀	足利教授
演習	Raghu-varṇa	足利教授
"	Açoka 王碑文	足利教授
哲學		
演習	章學誠・文史通義	重澤教授

# The Yung-chêng Emperor's View of Confucianism, Buddhism and Taoism as a Single Unity

*Shunkō Tsukamoto*

It is said that the emperor was versed in all Chinese learning, especially in the study of the Zen (Ch'an 禪) sect. The emperor, who called himself Yüanming chü-shih 圓明居士, stated that Confucianism, Buddhism and Taoism are single unity and that the essence of these, Hsing 性 Hsin 心, Chung 中 and I—, were the same through the meditation of the Zen sect. The author thinks that such religious awakening of the emperor was the back-ground for his political ideology.

## On the Policies to Clean up the Tax-arrears (Min-chien 民欠) for the Yung-chêng Period

*Hiroshi Iwami*

The amount of tax-arrears which had been rising since the K'ang-hsi 康熙 period had come to be incalculable by the begining of the Yung-chêng period. They were divided into two categories: on the one hand, that money which was falsely alledged to be unpaid by the collectors, and on the other, the debts which were truly unpaid. The Yung-chêng emperor tried to exempt people from such debts first, then to have them pay it on the installment plan. And when the arrears were completely paid by the fixed term, the emperor exempted those who paid from the same amount of tax in the next term. This policy of his served two ends, the one to make up the loss, and the other to show his generosity.

## On the Suppress of Ch'ing-chia-miao 仲家苗

*Naosada Kano*

The difficulties of controlling the Miao area inhabited by the Miao tribe (Miao-ch'iang 苗疆) was a traditional anxiety of the chinese government. First, the Ch'ing dynasty had allowed them to govern themselves by appointing the chieives Tu-kuan 土官, following the precedent of the Ming dynasty. Then it changed its policy and adopted the Kai-tu-kuei-liu 改土歸流 policy of ruling by Chou-hsien 州縣 system. This policy was pushed forward actively during the Yung-chêng period especilly by Ê-êrh-t'ai 鄂爾泰. The author tries to describe this policy by analysing the most violent Miao tribe, Ch'ing-chia-miao's rebellion suppressed by Ê-êrh-t'ai.